

第4章

第2期保幼小連携・接続推進事業の 成果と課題 及び 「連携・接続」で大切にしたいこと

第1章から第3章では、市内小学校での「連携・接続」の取組状況や「連携・接続」に関わる研修会の内容、小学校を核に隣接する就学前施設を一つのブロックにした3つのブロックの「連携・接続」に関する実践研究等の取組を紹介してきました。

第4章では、第2期「保幼小連携・接続推進事業」の成果と課題、そして就学前施設や小学校で「連携・接続」を進める際にどのようなことを大切にすればよいのかという視点で、第2期（令和2・3年度）の取組を通して見えてきたことをまとめました。第1期の「保幼小連携・接続推進事業 平成30年度・令和元年度 取組まとめ」の“第4章「連携・接続」で大切にしたいこと”と合わせてご覧ください。

第4章－1 第2期保幼小連携・接続推進事業の成果と課題

(1) 主な成果

○新型コロナウイルス感染症拡大防止・予防に関わる様々な制約が伴う中でしたが、研究においては、指定施設の「何かできることはないか」の発想のもと、写真やDVD、ICT（オンライン）を活用した交流会や会議、研修会等が実施された。また、研修においても、オンラインを活用して各施設で受講することができた。

- ・「できることからやってみる」という気持ちと「できるときに実施する」というフットワークの軽さが、保幼小の教職員同士の関係性を、身近なものにした。
- ・小学生は、保育所・幼稚園の先生や園児とのオンライン交流を通して、交流体験への思いや願いを膨らませ、自分自身の成長を感じ取っていた。保護者からも「子どもがオンラインで先生や園児と話ができ、喜んで帰ってきた」という反応が寄せられた。
- ・5歳児は、昨年度一緒に過ごしたお兄さん、お姉さんが一年生になって画面の向こうで自信をもって話している様子を目にして、小学校への期待や楽しみにする気持ちが培われた。また、就学前施設の教職員は、子どもの成長を感じることもできた。
- ・教職員は、コロナ禍にありながらも、従来の交流にとらわれることなく動画や Teams など、いろいろな形で、お互いの教育・保育を知ることができた。継続的、計画的な交流が子ども同士の信頼感や心の通じ合い、育ち合いにつながることを実感した。

○保幼小交流会（就学前施設と小学校の管理職を中心とする交流会）については、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が発出されていないときに、対面で実施することができた。

- ・参加された就学前施設の先生方からは、「小学校の先生と意見を交わす機会は本当に少ないため、貴重な交流ができた。相互のカリキュラムを理解し合い、子どもたちの健やかな成長や育成につなげていけるように、今後も意見交流を行うことができるとよいと思う」「交流会により、様々な立場の方からのご意見を伺うことができ、今後のヒントをいただくことができた」などの感想が寄せられた。
- ・小学校の先生方からは、「新しい国の流れを取り入れた具体例も聞けて、とても分かりやすい研修だった。交流会では特に保育園の先生と話ができる機会が少ない中、短時間であったが貴重な充実した交流ができた」「連携・接続について具体的な声を聞くことができよかった。子どもたちの豊かな学びのために、0歳児～小、中、高へとつながる大切さを再確認できた」などの感想が寄せられた。



○第1期保幼小連携・接続推進事業から継続して事業を推進することで、「連携・接続」の重要性・必要性についての理解や取組への意識は広がった。

(2) 主な課題

- 研究指定を受けることで、「教職員の連携・接続の意識が図られた」「取組が充実した」「施設間のつながりが深まった」などの感想がたくさん得られたが、研修や研究報告に参加された施設において、どれだけの取組の進展があったかについては把握できていない。
 - 就学前施設においては、公私幼保様々な施設種別や、各施設での「連携・接続」の考え方、小学校との関係性（地理的にも、これまでの連携・接続の実態的にも）がある中、一律に推進できるものではないため、今後も参考事例として取組を発信していく必要がある。
 - 小学校においては、スタートカリキュラムの作成が大きな課題である。教育委員会との一層の連携が必要である。
 - 研究テーマについては、これまで、「連携・接続」の取組を広めることに重点を置いたため自由テーマとしてきたが、本市の「連携・接続」の課題も見えてきたので、これまで通りの「広める」要素と、「連携・接続」の取組状況を踏まえた設定テーマで「深める」要素も必要である。
- ※各施設での「連携・接続」の取組に活用していただけるように、今後も継続して研究や研修を通して、「連携・接続」の取組の参考事例や、カリキュラムの作成事例等を発信する。

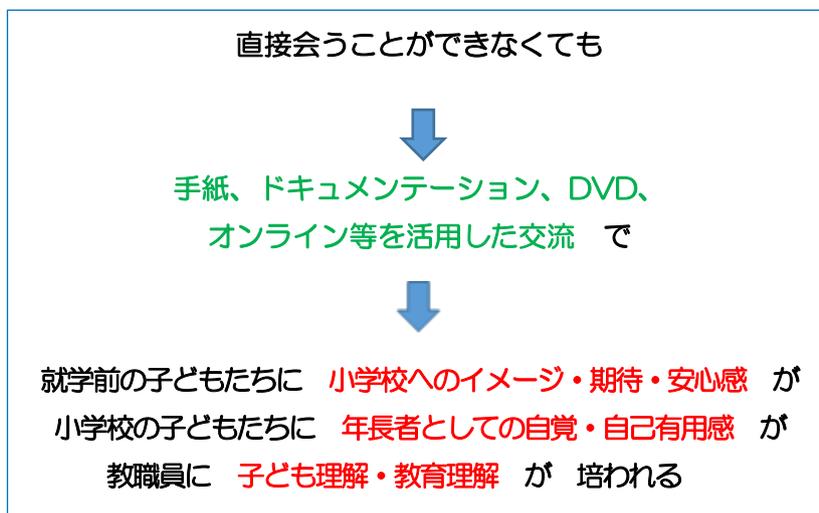
第4章-2 「連携・接続」で大切にしたいこと

1 コロナ禍でもできることはある

第2期は、新型コロナウイルス感染症拡大による「緊急事態宣言」や「まん延防止等重点措置」が発出され、子ども同士が直接に会って交流することが難しい中、「保幼小連携・接続研究」の各ブロックでは、その代わりに「何かできることはないか」の発想で検討が重ねられました。

そして、手紙やドキュメンテーション（写真と言葉）、学校紹介のDVD、オンライン等を活用した子ども同士の交流会が実施されました。就学前の子どもたちには、小学校のイメージや期待、安心感の醸成につながり、小学校の子どもたちには、年長者としての自覚や自己有用感の育成につながりました。手紙やドキュメンテーション（写真と言葉）、DVD等を介在させたり、オンラインを活用してスクリーンを通したりした間接的な出会いや交流でしたが、相互にねらいを共有して進めることで、「連携・接続」の目的に迫る取組になりました。

感染症対応・対策に時間も労力も気も使わねばならない中でしたが、4月に小学校に就学する子どもたちが希望をもち安心して小学校生活がスタートできるように、様々な工夫をした取組が実施されました。（詳細については、第3章 保幼小連携・接続研究 参照）



オンラインで子ども同士が交流をしている



小学生からもらった質問の答えに見入っている

また、コロナ禍のため教職員が集まることも困難な状況でしたが、各ブロックでは、オンラインを活用して会議を開いたり、施設ごとに講師を招いて「連携・接続」に関わる研修を実施したりされ、これまで以上に「状況や情報の共有」ができたようでした。また、こうした取組を通して、相互の子ども理解・教育理解につながりました。

「コロナ禍だからできない」から「コロナ禍でも何かできることはないか」に、柔軟に発想することで、「〇〇はできなくても、□□ならできる」の熱意と工夫を生み、様々な取組が実践されたのだと思います。

2 研修会を効果的に活用する

第1章「小学校と就学前施設との「連携・接続」取組状況等調査」の結果の「連携・接続」の取組を進める上での課題に、「教職員の意識化・理解」がありました。

「連携・接続」の必要性はわかっている、どのように進めればよいのか、どのように教職員の意識化を図ればよいのか等の課題解決に向けたヒントが、毎年実施している「保幼小連携・接続研修会」や「保幼小連携・接続研究報告会」にあります。

「連携・接続」の取組がなぜ必要なのか、なぜ重要なのか、どのようにすればいいのか、どのような実践があるのか、アプローチカリキュラムやスタートカリキュラムはどのようにして作ればよいのか等々、ニーズに応じた回答やヒントが、研修会や実践報告会の中にあります。是非、管理職自身や教職員の情報収集、意識化、自校園所の取組の振り返りや改善、充実に活用してください。

令和3年度に実施した研修会の内容の一部を紹介しておきます。詳細については、第2章をご覧ください。

(1) 育ちゆく先を見据えて、それぞれの発達の特徴を踏まえた保育・教育の充実を

佐久間先生は講義（20 ページ）の中で、幼児教育においては、「幼児の自発的な遊びを生み出す保育の探究と、これまでの経験則として継承・蓄積された指導技術の可視化を図ることも求められている」と話されていました。また、小学校教育においては、「これからの社会を創り出していく子どもたちが、社会や世界と向き合い関わっていくために、学習する子どもの視点に立ち、教育課程全体や各教科の学びを通して何を育むのか、18歳の段階で身に付けておくべき力は何かを考えながら教育を進めることが求められている」と話されていました。

乳幼児期の学びの特徴を踏まえた教育・保育の充実と、子どもたちが育ちゆく未来を見据えた教育の推進が大切であること、就学前施設と小学校がそれぞれのねらいを明確にして教育・保育を充実させることが大切であることを再認識しました。

(2) 接続期を丁寧に

鈴木先生は、講義（24 ページ）の中で、「子どもの発達や学びの連続性を保障するため、両者の教育が円滑に接続して、教育の連続性・一貫性を確保し、子どもの体系的な教育が組織的に行われるようにすることが極めて重要であり、その際その一方が他方に合わせるのではないことに留意することが必要である」とし、「自覚的な学びへと至る前の段階として“遊びにおける楽しさからくる意欲や遊びに熱中する集中心、遊びの中での気付き”“調べる、比べる、尋ねる、協同するなど様々な手法を組み合わせる”“楽しみながら課題を見出し解決する取組”等を通して、“学びたい、知りたい、調べたい”等小学校以降の自覚的な学びにつなげていくことが大切である」と話されました。

小学校以降の教育を視野に入れた教育・保育、とりわけ学びの特徴が移行する接続期の取組が極めて重要であると感じました。

(3) 支援が必要な子どもの学びと支援を確実につなぐ

小野先生は、講義（29 ページ）の中で、愛着形成について、乳幼児期、児童期、思春期、青年期の特徴をあげ、乳幼児期の身近な人（親を始めとする養育者）を信じるといった情緒的安定が次の期の愛着形成につながっていき、「自分を信頼し他者を信頼し、社会的成員としての価値を見出していく」ことを伺うことができました。各期の愛着形成が、その後の心身の発達に強く影響を及ぼすこと、日々の教育・保育が乳幼児期や児童期の子どもたちの愛着形成に及ぼす影響を再認識しました。

また、支援が必要な子どもに関わる、就学前施設と小学校との連携・接続においては、「個別の教育支援計画を作成し、小学校につなげることが大事である」とし、「子どものニーズ、支援の目標や内容、支援を行う者や機関の役割、支援の内容や効果の評価方法等」「子どもの暮らしの場（園、家庭、医療・養育など）全てを対象」に、「保護者と一緒に」作成することが大切であると話されました。

個別の教育支援計画を基に、子どもの発達の状況と支援を小学校に確実に引き継ぎつなぐことで、一人ひとりの子どもが、就学前の学びや育ちを基盤にした小学校での学習や生活を始められるのだと思います。

3 「交流会のための連携」から「教育の接続のための連携」へ

「連携・接続」の視点で自校自園所の教育・保育を振り返ることが大切です。

(1) 乳幼児期の特性を踏まえた教育・保育の充実 アプローチカリキュラムの作成

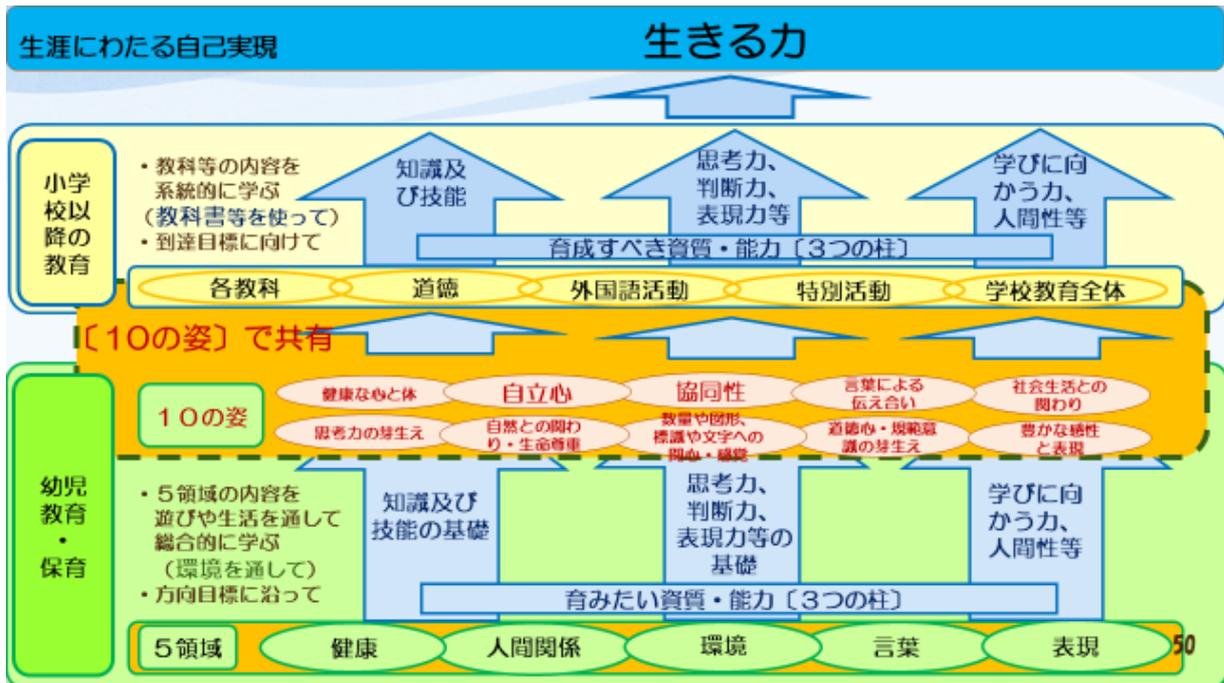
就学前施設の先生方には、
乳幼児期の発達の特性を踏まえた、遊びを通した教育・保育の充実に取り組んでいただくことが何よりも大切です。その「充実」の中には、小学校以降の教育につながる「育みたい資質・能力」の〔3つの柱〕や「幼児期の終わりまでに育ってほ

就学前施設に求められる「連携・接続」

- 乳幼児期の発達の特性を踏まえた教育・保育の実践
（遊びを通した「生きる力の基礎」の育成）
- 小学校への期待・安心感等心の育成・醸成
（カリキュラムへの位置づけ）
- 児童期の子ども理解・小学校教育の理解

しい姿」〔10の姿〕の視点で、日々の教育・保育を見通し、実践し、見直し改善する実践を積み重ねると、子どもの学び・育ちの姿を小学校の先生方に伝える取組が欠かせません。

そのためには、児童期の子どもの発達理解や、小学校でどのような教育がされているのかを知り理解することが必要になってきます。また、小学校への期待や安心感といった心の育成や醸成についての取組を、教育課程や月の指導計画等に位置づけ、組織的に取り組んでいくことが重要です。



(2) 就学前の学び・育ちをつなぐ実践 スタートカリキュラムの作成

連携・接続取組等調査の結果報告でも触れたように、本市のスタートカリキュラムの作成率はたいへん低い状況です。

小学校に求められる「連携・接続」

- 幼児期の子ども理解
- 幼児教育・保育の理解
- スタートカリキュラムの作成（更新）

小学校の先生方には、就学前施設から1年生に就学してくる子どもたちの、就学前の学びの様子や育ちの状況を踏まえて、子どもたち一人ひとりが自分らしさを発揮して、小学校での学習や生活がスタートできるように、どの時期にどのような内容の学習や活動を設定するのか、どのような展開にするのか、教育課程に位置付けて取り組むことが求められています。

就学前施設と小学校が相互に、子どもたちの学びや育ち、教育の連続性を、保育の計画や教育課程に位置付け、意識してつなぐことで、子どもたち一人一人が、それまでの学びや育ちを生かしながら、いきいきと学び生活する姿を目にすることができると考えます。

就学前施設と小学校が相互に、子どもたちの学びや育ち、教育の連続性を、保育の計画や教育課程に位置付け、意識してつなぐことで、子どもたち一人一人が、それまでの学びや育ちを生かしながら、いきいきと学び生活する姿を目にすることができると考えます。

「幼児期の子ども理解」「幼児教育・保育の理解」「スタートカリキュラムの作成（更新）」の視点で、自校の連携・接続の取組を振り返り実践へつなげてください。

4 相互のねらいや子どもへの関わりを明確にした交流会

多くの小学校で実施されている「子ども同士の交流会」が、招待する・招待される関係にとどまっていないか、就学前施設と小学校がそれぞれのねらいや指導者・保育者の関わりを明確にした取組になっているか、就学前施設と小学校が共に振り返り共有してみてください。

下記の交流計画案は、第1期の「保幼小連携・接続推進事業 平成30年度・令和元年度 取組まとめ」のAブロックの資料（冊子60ページ）です。

保幼小それぞれのねらい

南大江小学校2年生と銅座幼稚園・南大江保育所との交流会計画案

○日時 令和2年1月23日（木） 13:50~14:35

○場所 南大江小学校講堂

○ねらい 2年生：年長児を温かく迎え、一緒に楽しく過ごすことにより、思いやりの心を育てるとともに、新年度、上級生になることへの自覚を高めるようにする。
幼稚園：小学校での2年生との交流、また小学校教職員との出会いを通して、小学校生活へのイメージや、期待感を磨かせる。
保育所：小学校での2年生との交流、また小学校教職員との出会いを通して、小学校生活へのイメージや、期待感を磨かせる。

○参加者 南大江小学校2年1組 30名、2組 30名、3組 31名、4組 30名 計121名
1組担任・2組担任・3組担任・4組担任 うめのみ
銅座幼稚園 もり組 24名 そら組 23名、計47名 もり組担任・そら組担任
南大江保育所 ゆり組 26名 ゆり組担任

小学校指導者の援助及び配慮	時間	予想される活動	幼稚園・保育所指導者の援助及び配慮	育ちの見過し
・年長児に分かりやすい「おもちゃランド」の遊びの図や紹介パネルを作成し、幼稚園・保育所に届ける。	13:40 出	○事前に手紙のやりとりをする。 ○幼稚園は南門から、保育所は正門から入校し講堂へ移動する。 ○そら組、もり組は講堂前で、ゆり組は保健室前で靴を脱ぎ、講堂に向かう。下靴は靴袋に入れておく。	・事前に2年生から届いた遊びの図を見せるなどして内容を伝えたり、幼児から手紙動に期待がもてるようにする。 ・通学路を確保しながら安全に誘導する。	見過しをもって活動に参加する【健康な心と体】 きまりを守る必要性が分かる【道徳性・規範意識の芽生え】
・おもちゃの紹介遊び方・ルールなどをわかりやすく伝えることができるよう励みます。 ・年長児に遊ばせてあげたいという気持ちを大切に、ヘアでの活動を見守りながら、スムーズに進むように声をかける。 ・けがや事故のないように安全面に留意する。 ・一つ一つの遊びの場で工夫して遊べるよう、十分に時間をとって活動するよう声をかける。 ・年長児の気持ちを尊重し、一緒に楽しく遊ぶ方法を考えながら活動するように声をかける。	14:10 場	・みんなで「さんぽ」を歌う。 ○2年生が「おもちゃランド」の各コーナーのおもちゃの紹介をする。 ○2年生と年長児がペアで一組に各コーナーを回っておもちゃで楽しく遊ぶ。 ・おもちゃの遊び方やルールを、実物や紹介パネルを使って分かりやすく簡単に説明する。	・2年生の話をよく聞いて活動に参加できるよう励まし、かわらうとする姿を見守る。 ・遊び方やルールの話を聞き、楽しく活動に参加できるように援助する。 ・遊びながら「動くおもちゃ」の動きに興味をもったり、遊び方を工夫したり試したりしているところを認める。 ・小学生に楽しみをもって関わっていくように見守り援助する。	諦めずにやり遂げることで自信をもつ【自立心】 自分の力で行うために考えたり試したり工夫したりする【自立心】 遊びの中で小学校生活に興味や期待をもつ姿を受け止め、共感し、他児とも共有できるようにする。 ・遊びながら「動くおもちゃ」の動きに興味をもったり、遊び方を工夫したり試したりしているところを認める。 【思考力の芽生え】 自分の気持ちを調整し、きまりを守ろうとする【道徳性・規範意識の芽生え】 考えたり予想したりすることを楽しむ【思考力の芽生え】 遊びの中で、高低・大小・多少や文字の意味などに気付く【数量・図形、文字等への関心・感性】
・『つくってみようコーナー』では年長児の様子をよく見ながら、一緒に作ったり試したりできるように励みます。 ・2年生から感想を伝えるようにし、年長児と伝え合うことができるよう、支援する。 ・「おもちゃランド」開催の達成感や満足感を味わえるようにする。	14:30 場 振り返る	『つくってみようコーナー』1か所 ・ハッチンガエル ○ペアで集合し、遊んだ感想をペアで伝え合う。 (進行 小学校担任) ○代表の児童と年長児が感想を発表する。 (進行 小学校担任・幼稚園保育所担任) ○2年生がおわりのあいさつをする。 ○上着や靴袋は奥椅子から取り、帰る準備をする。 ○講堂より帰る。ゆり組は保健室前で、そら組・もり組は講堂前ホールで下靴に履き替える。 ゆり組は玄関から帰る。そら組・もり組は南門で保護者へ引き渡す。 ○2年生は片づけをして、教室へ戻る。	・作り方を小学生に聞いたり、一緒に作ったりできるように見守り、援助する。 ・自分の思いや感じたことを伝えられるよう言葉を引き出し、満足感を味わえるようにする。 ・楽しかった気持ちに共感し、小学生に感謝の気持ちを伝えられるように促す。 ・交流を通して、小学校への楽しみや憧れの気持ちをもつ、期待感をもって就学できるようにつなげていく。	気持ちを言葉で伝え合う【言葉による伝え合い】 相手の話を注視して聞く【言葉による伝え合い】 充実感をもってやりたいことに打ち込む【健康な心と体】

このように、交流計画案に明記することで、交流会を通した子どもの学びや育ちが明確になります。また、交流計画を立てる過程において、幼稚園・保育所・小学校の教職員がそれぞれの子どもの姿や教育内容を交流することが、まさしく「連携・接続」そのものです。このように相互にねらいや子どもへの関わりを明確にして取り組むことで、交流会を通した子どもの学びや育ちが一層可視化され、交流会を通した教職員の達成感や次の「連携・接続」への課題も明確になってきます。

5 育てほしい子ども像から「共通項」を見出す

小学校を核として近隣の就学前施設の代表者（管理職や連携担当者）が集まり（対面でもオンラインでも）、みんなで「どんな子どもに育てようか」「何を大切にして教育・保育しようか」を話し合い、共通項（それがその「地域の子どもの育成の柱（主題やテーマ）になる場合もある）をもち、それぞれの施設の教育・保育の中で実践する中に、「連携・接続」があるように思えます。

子どもの「育ち」(発達、成長)、子どもの「育て」(育成、指導)、日々の「育ち」「育て」の中で、「何を大切にしたいのか」「どんな人に育ててほしいのか」、主体性、意欲、協同性、感じる心、伝える力、粘り強さ等・・・、子どもたちの実態からきっと「育ててほしい共通項」が見つかると思います。そこに視点を当てて、各校・各園・各所でそれぞれの教育・保育に取り組み、実践を交流し合う。子ども同士の交流会がなくても、就学前施設と小学校が「育ててほしい共通項」をもって教育・保育に取り組むことで、子どもは安心感をもち豊かにたくましく育っていくのではないかと思います。

「連携・接続」が目的ではなく、「連携・接続」の取組を通して、子どもたち一人一人が経験を生かして心豊かにたくましく育つこと、教職員の子ども理解・教育理解が進み、それが日々の教育・保育に生かされることこそが目的であることを常に振り返りながら進めることが大切だと思います。

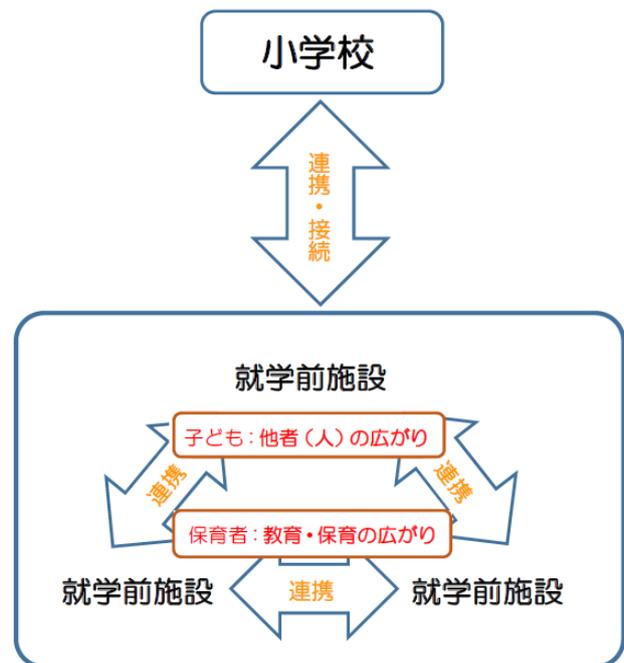
6 就学前施設同士の連携も大切 縦・横の連携で一層充実する「連携・接続」

連携・接続の取組は、就学前施設と小学校との縦の連携だけでなく、就学前施設同士の横の連携や教育・保育状況を紹介し合うことがあって、一層充実した取組になります。

第1期、第2期の研究を通して、多くのブロックでは、公立・私立、幼稚園・保育所(園)・認定こども園の施設種別を越えて、保育参観をされていました。

「連携・接続」というと、小学校との連携と考えてしまいますが、就学前施設同士の連携・交流で育まれる子ども同士の人間関係の広がりや、保育者の教育・保育の広がり、小学校との連携や教育の接続につながっていくものと考えます。

就学前施設同士の「横のつながり」と小学校との「縦のつながり」の中で、子どもたちは豊かに育まれるのだと思います。



7 資料を参考にする 関連資料がたくさん出ています！

「連携・接続」に関する資料は、国や自治体、大学教授等から様々な冊子やリーフレット、論文等が発行されています。ここでは、その中から、文部科学省・厚生労働省や、近隣の自治体・教育センター等から発行されたものをいくつかをあげておきます。インターネットで閲覧することができますので、参考にしてください。

【文部科学省・厚生労働省等】

- ・保育所や幼稚園等と小学校における連携事例集
〔H21.3 文部科学省・厚生労働省〕
- ・幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について 報告
〔H22.11 幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力会議〕
- ・スタートカリキュラムの編成の仕方・進め方が分かる スタートカリキュラム スタートブック
〔H27.1 国立教育研究所〕
- ・平成 28 年度 幼児教育実態調査
〔H28.3 文部科学省初等中等教育局幼児教育課〕
- ・幼小接続期の育ち・学びと幼児教育の質に関する研究 報告書
〔H29.3 国立教育研究所〕
- ・発達や学びをつなぐスタートカリキュラム ～スタートカリキュラム導入・実践の手引き～
〔H30.3 国立教育研究所〕
- ・幼保小の架け橋プログラムについて
〔R3.12 文部科学省中央教育審議会 幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会〕

【近隣自治体の教育委員会・教育センター等】（平成 30 年度以降発行されたもの）

- ・スタートカリキュラムの編成の仕方・進め方がよく分かる
スタートカリキュラム 学びの接続 モデルリーフレット
～幼児教育と小学校教育をつなぐ工夫～ 〔H30.3 大阪府幼児教育センター〕
- ・就学前教育カリキュラム
〔H31.3 大阪市保育・幼児教育センター〕
- ・保幼小連携・接続推進事業 平成 30 年度・令和元年度 取組まとめ
〔R2.3 大阪市保育・幼児教育センター〕
- ・指導の手引き 学びと育ちをつなぐアプローチカリキュラムの作成
〔H30.3 兵庫県教育委員会〕
- ・指導の手引き 幼小の接続を意識した教育実践と接続期もカリキュラムの充実に向けて
〔R3.3 兵庫県教育委員会〕
- ・平成 29 年度 幼児期に育みたい“こうべっ子”の資質・能力研究事業
幼小接続のための連携推進事業 幼小の学びをつなぐ実践事例集 I
〔H30.3 神戸市教育委員会〕
- ・京都市 保幼小連携・接続パンフレット 子どもの学びと育ちをつなぐ
〔R2.3 京都市教育委員会〕
- ・心と学びをつなぐ幼小連携
〔奈良市教育委員会〕

あとがき

第2期（令和2・3年度）は、コロナ禍の中での事業の推進でした。

研修においては、オンラインを活用して実施しました。施設から受講できる利点はありましたが、大学教授等の講義や当センターからの取組報告を聞いた後に、就学前施設と小学校の先生方が情報交流することが十分にはできませんでした。唯一、令和3年11月8日に実施した研修会後の交流会では、コロナ禍の中での「連携・接続」の取組の難しさと、その中での貴重な取組が紹介されました。社会に様々な問題が起きても、毎年、5歳児は小学校に就学していくことを踏まえ、常に「何ができるか」を考え実践する大切さを共有しました。

また、研究においては、各ブロックとも「コロナ禍の中でできること」を考え工夫した取組がされました。子ども同士が直接会うことができない状況の中で、手紙や写真、DVD等を介在して交流したり、オンラインを活用してパソコン画面やスクリーンを通して交流したりする工夫がされました。ブロック内の会議や研修も、オンラインを活用して実施されました。「直接会うことができない代わりにできること」で熟考した妙案でした。

第2期（令和2・3年度）の「保幼小連携・接続推進事業」は、上記のような状況の中での取組でしたので、「コロナ禍の中で」と副題を付けました。

先行きを見定めることの難しい状況下でも、みんなで知恵を出し合い工夫し合って実践してきた「子どもたちの学び・育ちをつなぐ取組」は、必ず今後の取組の参考になるものと思います。

第1期の「保幼小連携・接続推進事業 平成30年度・令和元年度 取組まとめ」と併せて活用していただきますようお願いいたします。

最後に、コロナ禍の中、本市の「連携・接続」の取組の推進にご協力いただきました講師の先生方、研究の推進にご尽力いただきました各ブロックの先生方にお礼を申し上げます。



保幼小連携・接続推進事業 第2期（令和2・3年度）取組まとめ

令和4年4月 発行

編集・発行者 大阪市こども青少年局 大阪市保育・幼児教育センター

〒535-0031 大阪市旭区高殿 6-14-6

TEL 06-6952-0173 FAX 06-6952-0178